

賀茂祭（葵祭）

日付：5月15日

賀茂祭は上賀茂神社の最も重要な毎年恒例の祭りで、国の平和と安全、そして国民の幸福を祈願するために、賀茂御祖神社（下鴨神社）と共同で開催されています。7月の祇園祭、10月の時代祭と並んで、京都で最大かつ最も人気のある3つの祭りの1つです。5月15日には、平安時代（794～1185）の伝統的な衣装を着た参加者が京都御所から下鴨神社、上賀茂神社に向かう壮大な行列を見るために、観客が通りに並びます。賀茂祭は、葵（野生の生姜）が桂の枝に巻き付けられた特徴的な飾りにちなんで、一般的には「葵祭」として知られています。この装飾は、二つの神社や祭りの参加者の服を飾り、賀茂祭の起源を物語る上賀茂神社の伝説にある儀式的装飾を表しています。

祭りの行列

賀茂祭の行列で最も重要な人物は、勅使（天皇陛下の使者）とい、名誉上の巫女（斎王代）です。勅使は上品な黒い装束を着ており、豪華に着飾った斎王代は特定の輿に乗っています。その他の参列者は、平安時代の宮中の様々な人物を再現しており、軍事に関わる役人や御幣物を管理する役人、楽師、舞人、公家の女性、女官、神聖な乙女などがいます。歴史的に最高位の参加者を運ぶために使用された2台の装飾された牛車と、鮮やかな色の花で飾った大きな傘がお祭りの雰囲気を高めます。行列は午前10:30に京都御所から下鴨神社へと出発し、下鴨神社で様々な儀式が行われます。少しした後、行列は上賀茂神社へ向かい、午後3時頃に到着します。勅使が橋殿で神様への特別な演説を読み、その後に奉納の舞やその他の儀式が続きます。最後に、神社の一の鳥居から二の鳥居まで馬を駆けさせて、お祭りは終わります。

賀茂祭の起源

欽明天皇（509–571）の治世中、嵐と洪水が国を襲い、作物の栽培が困難になりました。天皇が占いをさせると、災害の原因は賀茂別雷大神の怒りであると分かりました。天皇は神をなだめるために上賀茂神社へ勅使という使者を派遣し、賀茂別雷大神が神聖な神山へ降り立った伝説を基にした儀式を行いました。お祭りの後、天候は落ち着き、豊作が戻ってきました。これが賀茂祭の起源とされています。

賀茂祭の歴史

神社の記録によれば、上賀茂神社は6世紀から賀茂祭を開催していると考えられています。京都が首都になってから間もなくの807年、賀茂祭は、勅使が天皇に代わって奉納物と祈りを捧げる、宮廷によって公式に支持された儀式である「勅祭」になりました。何世紀もの間に、賀茂祭の行列は、宮廷の情勢によって中止されたり開催されたりしてきましたが、上賀茂神社での儀式は毎年続けられ

てきました。戦後、1953 年に、豪華な勅使の行列が復活し、1956 年には斎王代とその従者の部分が追加されました。

斎王代と斎王

斎王代が務める名誉巫女の役割は、1200 年以上前に始まった、斎王という巫女の歴史的な伝統に基づいています。810 年に、未婚の皇女が上賀茂神社の巫女を務めることが伝統になりました。彼女は占いによって選ばれ、その務めを担う間は斎王という称号で呼ばれ、主に賀茂祭やその他の儀式に参加しました。斎王の伝統は、神社の神様への宮廷からの畏敬の念を反映しており、約 400 年間続きましたが、高い費用がかかるため 1212 年に廃止されました。

現代では、斎王代は京都の未婚の女性から選ばれます。斎王代はかつて斎王が担っていた務めを果たし、5 月 4 日の御禊というお清めの儀式、5 月 15 日の賀茂祭、9 月 9 日の烏相撲、4 月の賀茂曲水の宴に参加します。